

『バースの女房の物語』のふさわしさ

高 野 秀 國

Geoffrey Chaucer の物語集 *The Canterbury Tales* (以下 *CT*) に登場する興味深い登場人物達の中でもとりわけ異彩を放つ存在の一人は *The Wife of Bath* (以下 *WB*) である。Wife は異例とも云えるほど長い 856 行に及ぶ “Prologue” (以下 *WB Prol.*) で鮮烈な自己主張を展開する。¹ 女一人大地に踏ん張って生きてゆくための、生气と活力にあふれた人間の欲望の充足を求めてひるむことのない主張。それは果たしてリアルな人間描写といえるか否かは疑問として、続く “*The Wife of Bath’s Tale*” (以下 *WB T*) はこの prologue の主張と共通する内容が、つまり如何にも Wife が語りそうな話が期待される。確かにその期待はかなりの程度まで叶えられるが、同時に語り手 Wife の口から出るとは思われぬ表現があり、聴き手/読者は違和感を覚える。たとえば初夜の寝室で老婆が騎士を説得する場面。本来語り手の Wife は *experience* を武器に、夫の学識や世間の *authority* と戦う立場である。しかしこの女のいわば分身である老婆は *Valerius*, *Seneca*, *Boethius* と権威を並べたてる。民話の人物が、そして市井の人である語り手が口にする筈がない人々の名前であり、これは学識豊かな作者自身の哲学的議論である。ましてや *Valerius* は Wife の夫 *Jankin* が妻を論難するために使っている道具であり、Wife が論拠に持ち出すのは矛盾も甚だしい。² 相手の手の中にある武器で相手を倒そうとするようである。又老婆の話の内容も人間の真の *gentleness* とは先祖から世襲するものではなく、*gentle* な行為をすることで神からのみ賜るものであるという主張の長広舌をふるってみせる。これも *WB Prol.* で知る限りの *WB* の日頃の言動とは全く結びつかないし、民話の人物に似つかわしくもない。あるいは語りの技法、修辞にも異質の点がある。よく指摘される個所であるが、騎士と老婆の結婚式について民話ならば当然ある程度の描写がある筈だが、後に述べるように *WB T* では *rhetorical joke* を使って避けてしまう。つまりは Wife よりも宮廷風の語り手の抑制した語法である。

本論はこうした違和感の由来について二つの方法で調べることを目的とする。第一は *WB T* と Chaucer 自身の他の作品との比較である。即ち *CT* の物語群の内の “*Shipman’s Tale*” (以下 *Sh T*) は元来 Wife の語る話であったという説があるので、二つの物語を *WB Prol.* との連続性を念頭に置きながら比較して *WB T* の特徴をさぐる。第二は物語の主旨や恐らくは *source* が *WB T* と共通する他の作者の作品が幾つか存在するので、それらとの相違点をさぐるように対照することで *WB T* の特異性を具体的に明らかにし、*WB T* は何故あのような内容になったのか手掛りを求める。この二

つの方法で Chaucer の意図を側面からの光で浮き上がらせる試みである。

WB T の粗筋は以下のものである。いにしへの Arthur 王の時代、王の家来の若い騎士が狩りの帰りに見かけた娘を力づくで犯した。王は騎士に死刑を宣したが、王妃と宮中の貴婦人達の懇願により騎士の身柄と処置を王妃にゆだねることとした。王妃は『女性が最も望むものは何か』一年の間にその答えを見つけて来るならば命を助けてやると騎士に告げる。渋々と旅に出掛けた騎士はいろいろの答えを聞くが納得のゆくものはなかった。期日が迫り帰る途中森の草地で想像出来ないくらい醜い老女と遭遇する。女は自分の要求することを騎士が必ず実行するという条件で答えを教える。宮中に帰り王妃と宮廷婦人達の前で騎士は教えられた通りに『女は男に対し主導権を握り、支配することを望むのです』と答え、これに異議を唱える女性は一人もいなかった。自由となった騎士に老婆は約束として結婚することを求める。初夜の床の中で嘆く男に老婆は人間の真の気高さとは何か説いて聞かせ、醜くて年老いている代わりに忠実で慎ましやかな妻と、若くて美しいが不実となる恐れのある妻とのいずれを望むか、騎士に選択させる。騎士はよくよく考えて老婆に選択を任せ、支配権をゆだねる。するとたちまち老婆は若く美しい姿へと変わり、二人は生涯申し分なく幸せに暮らした。

比較対象として取り上げる Sh T は既述のように初めは WB が語る話として用意されたもので後に現在の位置に移されたと考える学者が多い。それというのは、“The Man of Law’s Epilogue” (以下 ML Epil.) の中で Parson の言葉をさえぎって Shipman が口をはさむが、そのセリフの中に “My joly body schal a tale telle”³ (この私がお話をいたしましょう) (1185) とあり、同じ “my joly body” という表現が Sh T 423 にあるので女性の語った言葉、恐らくは WB の言葉と想像される。CT に登場する他の女性の巡礼達は聖職者であるからこの表現はふさわしくない。更には manuscript 中の “Shipman” (1179) は本来 “Wife of Bath” とあったのが抹消されて書き直されたいという考えもある。テキスト造りの際に Wife of Bath と改訂した編者もいる。あるいは Sh T の中で語り手が使う人称代名詞 “we” (14), “oure” (18), “us” (12,19) は文脈から既婚女性を示唆する。但し ML Epil. はテキストとしての正当性を疑う研究者も居るし、Sh T の女性の語り手も Shipman がその役に扮しているかもしれない可能性も全くは捨てきれないので、絶対的な論拠とは断言できないのは事実である。この点に留意しながら物語の内容に入ると、人物関係や物の考え方に WB Prol. との類似が見られる。

富裕な商人に美貌の妻が居た。社交好きで何かと金がかかるが、妻は夫が吝嗇だと常々考えている。ある折妻は多額の金が必要となり、この家に入出入りする若い修道僧に救いを求める。僧侶は夫からその額を借りて妻に手渡す。妻はその代りにこの坊主の予てよりの望みにこたえる。後に夫に金の返済を求められると、僧侶は奥さんに返しましたと云う。夫の詰問に澄ました顔で妻はあのお

金はもう着物に使ってしまいました、あなたへのお返しはベッドでしますと答える。夫は僧侶からの返済を話さなかったことで妻をたしなめながら仕方なく納得する。

これはフランス起源の *fabliaux* に属する好色譚である。商人の妻と WB には確かに共通する点がある。二人とも性格は派手で社交好き。自分のための浪費を好み、夫を吝嗇であると一方的に極め付け非難する。貞節とは到底言い難い道徳観を持ち、物欲の充足の方がモラルに優先する。Sex は自分たちの楽しみであると共に、男たちを自在に操るための有効な武器でもある。二人ともその点では自信があり、商人の妻は一部既述の通り “Ye shal my joly body have to wedde” (私の素晴らしい身体を抵当に差し上げますことよ)(423)と誇らしげで、WB は “I hadde the beste *quoniam* myghte be” (私のあそこは誰のよりも上等)(608)とうそぶく。二人の女はさらに共通点として新約聖書 1 *Corinthians* 7 の夫婦が互いの肉体に権利を有するという論しを都合よく解釈して、sex を夫婦の負債の支払であると述べる。支払方法もきわめて率直に明記されている。WB は “Now wherwith sholde he make his paiement, / If he ne used his sely instrument?” (夫が支払いをするには、あの嬉しいお道具を使うよりほかに仕方がないじゃありませんか)(131-2)とか “An housbonde I wol have I wol nat lette / Which shal be bothe my dettour and my thral, / And have his tribulacion withal / Upon his flessch, whil that I am his wyf” (夫を持ったら 邪魔なんかさせませんよ 私の債務者に、奴隷にしてやって、私が妻である限り肉体を苦しめてやりますわ)(154-7)と言い放つ。商人の妻も “Ye han mo slakkere dettours than am I!” (私ほどすぐにあなたにお金を返す人いるかしら)(413)と平然としている。更にはこれに関連した表現も共通しており “A likerous mouth moste han a likerous tayl” (飽食には好色が付き物)(WB Prol. 466)の “tayl” には性的な意味が含まれるが、“score it upon my taille, / And I shal paye as soone as ever I may” (私の付けにしておいて頂戴な、出来るだけすぐにお支払いしますから)(Sh T 416-7)の “taille” は負債の額を示す刻み目を付けた tally (割符、合札)を示すが、その裏に sexual organ の意味もある。二人の女性にとって、sex と金銭とが交換可能な価値を持っていることがよく判る。商人の妻が夫を懐柔するとどめの言葉はそれをよく表わしている。“By God, I wol not paye yow but abedde!” (神に誓ってお支払いはベッドの中でだけいたします)(424)

こうして女の武器を使って男を手玉に取る、したたかな人妻たちの性的表現が頻出する好色な物語という点の類似性が WB Prol. と Sh T とにあることが判る。では作者 Chaucer は何故 Sh T を現存する WB T で取り替えたのか、WB Tの方がよりふさわしいと判断したのか。WB T だけにある特徴とは何か。先の考察と同様二人の女性、すなわち今度は WB と騎士の命を救う老婆、いわゆる *Loathly Lady* の比較を中心に考えてみる。面白い事に二人の女はともに夫を前にして長広舌をふるう。WB は 144 行にわたり年老いた気弱な夫達に如何に彼らが女性に対して勝手に妄想を抱くか、そして如何にそれが不当なものであるか、一方的にまくしたてる。夫は妻の行状に嫉妬深い。男友達のことを疑う。女房が貧乏であれ金持ちであれ、美人であれ醜女であれ何か不満のたねを見つけ

る。女はがみがみ屋だという。女は結婚するまで欠点は隠しているから、品物を買うときのように善し悪しが調べられない。自分と自分の身内を大切にしないと女は怒る、などと夫は決めつける。でも夫を私の肉体と財産の二つとも主人にして成るものか。疑い深く見張られるのは真っ平だ。女達たちは完全な自由がほしいと宣言する。しかしWB自身が認めるように、今列挙した夫達のけしからん言動なるものは彼女が根拠なしに想定したもので、憐れな夫達は身に覚えのないことで攻撃されているというのが事実である。WBは夫婦の力関係について先手必勝の戦術をとったのである。一方WB Tで難題の答えを見つけられず苦しむ騎士の窮境につけこんでまんまと結婚の約束をさせた醜い老婆 民話の Loathly Lady は、私のような高い位の者がこのような不名誉をこうむるとはと嘆き、初夜の床でお前は醜くて年老いておまけに低い位の間人だと決めつけ、新たに陥った逆境に身もだえする夫におだやかに話しかける。いわゆる curtain lecture であり、122行にわたる。本当の人間の高貴さ (gentility) とは先祖の社会的地位によって遺贈され、受け継がれるものではない。常に徳高く立派な行為を心掛ける人こそ最も気高いのだ。お殿様の子でも下劣な行為をすれば最下級の人間である。私の祖先は生れは卑しくとも、神様のおかげで徳高い生活を送り罪を避けるなら立派になれるだろう。貧しさについては神も貧しい暮らしをお選びになった。貧に満足するのは立派なことで、貧は神と自らを知ることを教える。貧しい者はなにも恐れる必要がない。私は貴方を苦しめるものでない。又、私は醜く年老いているから不貞を働く恐れはない、と。老婆の主張の中心である gentleness の観念は当時特に珍しい考えではなかったようだが、老婆はそもそも物語の発端となった高い地位の騎士の破廉恥行為を痛烈に批判して相手を黙らせ、言葉は丁寧だが自分の考えの妥当性を主張する議論をくり広げてひるむことがない。こうして二人の女に共通するのは男に対して女性の立場を強く守る姿勢であり、自己主張を貫くことである。両者には物質的な欲望の充足だけで満足する Sh T の商人の妻には不十分にしか見受けられない女性の権利の主張という点で強い結びつきがある。

物語の他の部分にも夫と妻、あるいは一般的に男と女の力関係が取り扱われる。語り手WBはまず近頃はアーサー王の時代と違って妖精が出没して悪さをすることがなくなり有難い、なにしろ托鉢僧があちこちで法力で妖精を追い払って下さり、女性は外出しても何の心配もないのだ、托鉢僧に辱められる懸念以外は、と皮肉たっぷりに語り出す。男の横暴ぶりを示す導入部である。物語に入ると、ブリトン人が尊敬してやまぬアーサー王に仕える若い騎士が野原で乙女を凌辱する。男の許されざる蛮行とその裏にある男性中心の身勝手な考え方が示され、いずれ語り手を中心とする女性の主張の裏付けとなる。捕えられた騎士は斬首になるところ、王妃や貴婦人達の懇願により王妃に引き渡され、王妃が生殺与奪の権を握ることになる。たちまちに男女の力関係は逆転した。更に王妃は “of thy lyf yet hastow no suretee” (そなたの命がまだ保障されたわけではない) (903) と釘をさした上で、一年の猶予を与えるから “What thyng is it that wommen moost desiren” (女性が最も望むものは何か) (905) という問いの答えを見つけて来るよう要求する。これは後に述べるように類似の他のロマンスにも共通する課題であるが、この物語の騎士の犯した罪の種類を思い

合せてみれば、一段と強い意味を持つ。物語の中盤、騎士の求める答えを教える前に、老婆は騎士に“The nexte thyng that I requere thee, / Thou shalt it do, if it lye in thy myght”（一番にあたしが要求することを、出来ることならば、きっとやってみせる）（1010-11）と固く誓わせるが、自分の要求が何であるかそこでは明かさない。宮廷で王妃や貴婦人達の前で騎士が“Wommen desiren to have sovereynetee / As wel over hir housbond as hir love, / And for to been in maistrie hym above”（女性は恋人ばかりか夫にも優越することを、男性を支配することを望むのです）（1038-40）と答え、その場のすべての女性達はその答えに納得した後で初めて、老婆は私と結婚して欲しいと要求の中身を示す。見事に騎士を後戻りできない状態に追い込んでしまうのである。慌てた騎士の申し出る代替条件など一顧だにせず、私は醜く、年老いて貧しくとも絶対に貴方の妻、そしてあなたの愛する人でなければならない、と主張して譲らない。形ばかりでない心からの結婚を求める。先の課題への騎士の解答を早速実践するよう迫るのである。宮中の貴婦人達“Ful many a noble wyf, and many a mayde, / And many a wydwe, for that they been wise, / The queene herself sittynge as a justise”（大勢の高貴な夫人達、大勢の乙女達それに 賢明な方々ですので 大勢の未亡人、そして裁きの主宰の座にお付きの御妃様）（1026-28）が集う前で⁴この要求がなされる仕組みは、老婆がロマンスの登場人物として話すばかりか、女性全体の問題として訴えていることが判る。ちなみにWBは自分は未亡人の範疇に入るつもりであろう。さて物語の最後、長い説教のあとで老婆は夫の欲望を満たすためと言って、妻として貞節だが外見は醜悪な老女と若く美しいが不貞の恐れが多い女のいずれかを選ぶように求める。男に選択をゆだねることはもとより、選択肢の内容も女性的大幅な譲歩ともとれるが、これはお伽噺のパターンである。恐らくは外見より内面の美しさを求める選択をすることで、褒美として美しく変身した妻を与えられるのがお定まりの筋だろうが、精神の気高さを世襲の社会的地位とはかかわりない個人の問題として考えることを学んだ騎士は老婆の個性を、精神的存在を認めようとする。騎士は老婆を“My lady and my love, and wyf so deere”（わが貴婦人にしてわが恋する人、そしてげにいとしき妻）（1230）と呼んで選択権をこの女にゆだねる。老婆は“Thanne have I gete of yow maistrie.../ Syn I may chese and governe as me lest?”（では私の気に入るように選び決めてよいのですから、貴方より優位に立ったのですね）（1236-7）と確認してから美しい姿に変貌する。男性が男性本位の mastery を放棄し相手の精神的存在を認識したとき、相手の愛も十分に示される。“And she obeyed hym in every thing / That myghte doon hym plesance or likyng”（妻は夫を楽しませ喜ばせることは何でも言われるままにしました）（1255-6）。男と女の愛の相互関係（mutuality）と呼ぶ人もいる。⁵かくて二人は生涯申し分なく幸せに暮らした。男と女のあり方について Sh T より深い考察があることがよく判る。

しかし物語の終りにもう一波乱あって聴き手/読者は大いにとまどう。WBが物語とは別に急に望ましい夫の姿と夫婦のあり方を述べ、意に染まぬ男性を呪詛する言葉を並べ出す。やさしく、若く、ベッドの中では元気のよい夫が望ましく、夫よりは長生きしたい。妻に支配されぬ夫は短命であれ。年老いて怒りっぽく、ケチな男には疫病が降りかかると願う。女性に都合のよい主張に確か

に WB Prol.をしゃべった WB の存在はあるが、WB Tのこれまでの内容との一貫性は大分怪しくなる。もっともこれに似た表現が Sh Tの商人の妻の言葉(173-77)や “The Nun’s Priest’s Tale”の動物寓話で夫をののしるめんどり(2912-17)にも見られ、いずれも女性全体を主語に女性の視点からの理想の亭主像を語るものである。従ってこれらの個所は今日の読者が感じるほどに強烈なものではないのかもしれない。WB Tの筋の半ばで騎士が難題の答えを探して遍歴の旅の途中で得た様々な不完全な解答について、物語の進行を中断して WB が個人的な意見を述べる個所があるが、最後の部分も WB が全面に出ることで epilogue として WB Prol.と共に物語を挟みこんで形の上の連続性を強調したかったのかもしれない。しかし我々は語り手同様、その語る物語にもなめらかさが欠けている、多少のほころびがあるという印象を拭えない。結局作者は prologue の Wife の自己主張を物語でより強調すると言うより、Wife の姿を借り、Wife の口を通じて男性に対する女性の主張をより鮮明にする狙いがあったのであろう。そのための場面設定なら Sh T より WB T がはるかにより有効であったのだ。

WB Tのストーリーを構成するいくつかの要素は中世英国の物語に散見する。またとないほど醜い女 Loathly Lady の変身は民話によくある話で、それが蛙の王子様のような妖精物語のモチーフと結びついている。難題の解答を期限付きで求める状況も同様。Loathly Lady が極めて貴重な知恵あるいは強大な力を主人公に与えることと引き換えに主人公に性的な関係を要求するが、主人公の応諾によって美しく変貌するという話が繰り返し語られる。そこで WB T と類似の要素が多い作品、すなわち John Gower: *Confessio Amantis* (以下 CA) の Liber Primus 1407-1875 の “Tale of Florent” (以下 “Florent”) と、アーサー王伝説の重要人物 Sir Gawain にまつわる romances 中の “The Wedding of Sir Gawain and Dame Ragnelle” (以下 “Wedding”) 及び “The Marriage of Sir Gawain” (以下 “Marriage”) の二篇と比較する。その差異によって WB T の特徴を知る手掛りを得たいのである。

Chaucer と Gower に交流があったことは互いに作品中で相手に言及していることで確かである。Chaucer は *Troilus and Criseyde* の中で “O moral Gower” (1856)⁵ と呼びかけ、もし必要ならばこの本を正してほしいと願う。一方 Gower の CA の Liber Octavus 2941-2⁷ で女神 Venus は “And gret wel Chaucer whan ye mete, / As mi disciple and mi poete”⁸ (そしてそなたが我が信奉者、我が詩人チョーサーに会ったなら、挨拶して欲しい)(2941-2) とその名を挙げ、続けて Chaucer の詩業をたたえている。しかし二人の詩人がいずれも相手の作品から借用しているとは考えられない。もっとも “Bot as an oule fleth be nyhte / Out of alle othre briddes syhte” (しかし梟がほかの鳥達の眼を避けて夜飛ぶように)(CA 1727-8) と “al day after hidde hym as an owle” (それから一日中梟のように隠れていました)(WB T 1081) などこまかい類似があり、どちらかに多少の知識はあったかもしれない。Chaucer と Gower が共通の source を使ったであろう話は他にもある。⁹ この “Florent” も梓物語である。主人公 Amans (恋する男) は愛が不首尾の折には嘆き、不平をつづや

かないではられない。これに対して男の話を書く Confessor は出来る限り love の命令に従うことを忠告する。どんなに努めても叶わぬとき、obedience が love においてしばしば役立つから、と。そのよき例が書物にあることを私 Gower は思い出した、と言ってこの物語を始める。

物語の発端は WB T と他の三つの話では著しく異なる。WB T では Arthur 王の宮廷の騎士がおぞましい蛮行を犯して、罰として生命の危機を自ら招く。Florent はまず “A worthi knyht” (立派な騎士) (1408) と定義され、皇帝の甥でその宮廷に仕え武勲を願い、騎士道を守り、愛に憧れ、名声を求めて遍歴して冒険を探すが、“Fortune...Schop” (運命の企みによって) (1419 & 1421) 彼が戦って倒した相手の親族の城で囚われの身となる。“Wedding” と “Marriage” では共に Arthur が狩りの途中野中で一人にいるときに武装した騎士に襲われるのが発端となる。較べると WB T の男の身勝手な振る舞いが際立つ。

次に『女性が最も望むことは何か』という難問を課せられ、その解答を探すために一定の時間の猶予を与えられるのは四つの物語に共通する。しかし WB T のみは王妃が騎士の生死を決める権利を持つことで男女の力関係が逆転することと、この問いに問われる者への強い非難と皮肉の響きがあることは先に述べたとおりである。但し王妃の心中にはこの騎士の命を救いたい願があることは確かである。“Florent” では敵の中で智恵のある老女が策略で騎士を死に追いやろうとしてこの問いを出すし、他の二つの話で Arthur に罠をかける恐ろしい騎士は王の破滅を目論んでいる。

窮地に立った男達はいずれも答えを求める旅に出る。但し “Wedding” と “Marriage” では王は甥にあたる円卓の騎士 Sir Gawain に事態を打ち明け、二人は手分けして答えを見つけようとする。これは Gawain を主人公とする物語に多くみられる fidelity というテーマに力点が移行してゆくのである。WB T と “Florent” にはそのテーマはない。次に男達が得た答えは実に様々で、これこそが女性の最も求めるものとしてだれもが異口同音に一致して首肯する、という答えがなかった点は四つの物語に共通する。しかしさまざまな答えの内容の扱いは WB T と他の物語では著しく異なる。三つの物語では具体的な内容についてはほとんど触れていないが、WB T は騎士の得た答えを 64 行に亘って列挙する。即ち “richesse”, “honour” (dignified position), “jolynesse”, “array” (clothing), “lust abedde” (sexual pleasure), “oftetyme to be wydwe and wedde” (何度も結婚する), “yflatered and yplesed” (お追従) “to be free and do right as us lest” (好きなままの自由) 等々、それに語り手の Wife が口をはさんで『お追従』はほとんど正解に近いなどと個人的な感想で後押しをし、更にはなんで女に秘密が守れるものかとうそぶき、Ovid から Midas 王の口バの耳の話を持ち出し、王の秘密を守れなかったのは床屋ではなく王の妻であった、などと古典のストーリーをねじ曲げてまで主張の援用とする。つまりは女性達の真に人間臭い欲求の臆面もない羅列とその肯定である。当然ながら WB の用意した枠によくはまる。

困り果てた主人公が死の待つ場所へと戻る途中醜い老婆に呼びとめられる。この老婆の描写には Gawain の二篇の物語と “Florent” や WB T で違いがある。Gawain の物語では容貌が詳細に記述され、醜悪ぶりが誇張かと思われるほど強調される。“Wedding” では King Arthur は見たこともないよう

な奇怪な姿の女に会い “mervaylyd securly”¹⁰ (嘩然として立ちつくす)(230)。それも道理で、なにしろ赤ら顔は鼻汁をたらし、広い口の歯はすべて真っ黄色。ただれた目は巨大で、唇から牙がとび出し、頬は女の尻くらいある。背中にはこぶがあり、首は長くて幅広、髪はもつれて盛り上がり、肩幅は一ヤード、垂れた乳房は馬並み。この姿が豪華な布に覆われて高価な宝石や金に飾られた子馬に乗っている様子は不釣り合いも甚だしい。女の醜悪さの描写は、この女が宮中で王や王妃の面前に立ったところでも繰り返される。“Marriage” でも Arthur は荒野でオークの木と緑のひいらぎの間に座っている真紅の服の女を見る。そこまではロマンスの世界だが “Then there as shold have stood her mouth, / Then there was sett her eye; / The other was in her forehead fast, / The way that she might see. / Her nose was crooked and turned outward, / Her mouth stood foule awry; / A worse formed lady than shee was, / Never man saw with his eye”¹¹ (女の口のあるべきところに一方の目があり、もう片方の目は頬にしっかりついて物が見えるようになっている。鼻はゆがんで外を向いている。口は醜くねじれている。これほどひどい容貌の女は見たことがなかった)(57-64)。女は熱心に呼びかけるが “King Arthur had forgott his lesson, / What he shold say againe.” (アーサー王は答えるべき言葉も浮かばず途方に暮れた)(67-8) のも無理はない。こうしたくどい程度の loathliness の具体的な描写は、結局お伽噺のクライマックスで老婆から比類なき美女へみるみる変身する瞬間をより劇的に強調せんがためであろう。これに対して CA では “A lothly wommannysch figure, / That forto speke of fleisch and bon / So foul yit syh he nevere non” (忌わしい女の姿で、このように醜い生きた人間は見たことがない程)(1530-2) と記述は簡単で、更に WB T では “A fouler wight ther may no man devyse” (これより醜い人間は想像出来ない)(999) と一行で済ませている。Gawain の二篇の物語と比較することで、二人の詩人のそれぞれの目的がお伽噺と違うことがよく判る。彼等には老婆の醜悪さより言っておきたいことがある。Gower は love の価値と love における obedience の有用性を示す目的のために杵物語として “Florent” を使っているのであり、Chaucer は WB という人物を 写実的にか観念的にかはさておき 描くために WB の信じる女性のあるべき生き方を老婆に主張させているのである。

難問の答えを教えることと引き換えに老婆が誓言を求める個所も違いがある。Chaucer 以外の作品はいずれも老婆は自分と結婚する約束を教える条件とする。Gower では Florent に “er thou be sped, / Thou shalt me leve such a wedd, / That I wol have thi trowthe in honde / That thou schalt be myn housebonde” (首尾よくいく前に、誓っていただきましょう、あたしの夫になるようあたしに結婚の約束をすると)(1557-60) と迫る。“Wedding” では老婆は王に “yf myne answer save thy lyf, / Graunt me to be Gawens wyf” (私の答えで貴方様の命が救われるなら、Gawain 殿の妻になることをお聞き届けくださいませ)(285-69) と求める。流石に王は拒否するが Gawain は話を聞いて申し出を承知する。作品のテーマは友情と忠誠であり、愛や結婚より優先する。“Marriage” では更に驚くべきことに “Give thou ease me, lady,.../ Or helpe me any thing, / Thou shalt have gentle Gawaine, my cozen, / And marry him with a ring” (もし私を苦難より救うとか、何か助けてくれる

なら、ご婦人よ、我が縁者高貴なるガウェインをそなたに授け、指輪をしるしとして結婚させよう) (77-80) と Arthur の方から申し出る。愛とは全く懸け離れた世界である。それらに対して Chaucer では騎士は老婆の望むことをすると約束するが、老婆の望みが何であるかその時は判らない。それにもかかわらず騎士が約束するのは、騎士の女性理解の不足と男性的視点の継続を示すものである。又聴き手/読者には不確定要素がもたらす緊張感がある。そして難問の正解が宮中の女性達の前で述べられ、女性たち総ての承認を得られ、主人公の命が救われると判ったとき、Chaucer と他の作品との違いが際立つ。三つの作品では平板な描写で、とりわけ Florent は女は老齢だし、人目につかぬ所に置いておけばよい、などと怪しからん事を考えながら女のもとにしおしおと帰る。それに対して Chaucer では王妃の前に騎士について来た老婆は、“wyf” も “maide” も “widwe” も、つまり全女性が騎士の答えに反対せず、騎士の命が救われたと判るとすぐに、すくくと立ち上がり (“up stirte” 1046) 妃に騎士との約束の次第を告げ、自分の望みとして誓いにかけて騎士が自分を妻とするよう要求する。騎士や貴婦人達の驚愕する様子と老婆が自己主張する凛とした姿が鮮明である。物語の力点が他の作品と離れていくことが判る。

更に結婚の祝宴の様子の描き方も違いが著しい。“Wedding” で老婆は国中の貴婦人達が結婚の宴席に列なることを要求し、王妃よりも豪華な衣装をまとい、語り手も “So fowlle a sowe sawe nevere man” (こんな醜い牝豚は見たことがない) (597) とコメントする。宴会では最上の席で汚らしく礼儀知らずで、大皿六枚もむさぼり食らう。3 インチもある爪でパンを無作法に裂き、他の人々を待たずに勝手に手をつけ、次々と様々な種類の料理をあまさず食べてみせる。こうした長々しい記述も先に考えたように、Loathly Lady の物語に共通する見せ場、クライマックスの美しい変貌の驚きをより大きくするためであろう。これに対し Chaucer では “Now wolden som men seye, paraventure, / That for my necligence I do no cure / To tellen yow the joye and al th’array / That at the feeste was that ilke day. / To which thyng shortly answeren I shal: / I seye ther nas no joye ne feeste at al; / Ther nas but hevynesse and mucche sorwe.” (さてことによるとその日の宴席の喜びやお祭り騒ぎをお話する気配りを、私めがすっかりして怠ったとおっしゃる向きもおありでしょう。手短にお答えします。何の喜びも宴もありやしません、意気消沈と大いなる悲嘆これあるのみでした) (1073-9) とある。これは洗練された宮廷風の語り口でしゃれたレトリカルな表現を楽しんでいる。明らかに WB ではなく Chaucer が話している。この後に長々と続く WB T の一番の特異点であるベッドの上での新婦の curtain lecture が話し方といい豊富な文献への言及といい老婆にも更には語り手である筈の WB にもふさわしくなく、作者が前面に出て来ることを思い合せると、祝宴の描写回避は作者が物語のストーリーよりもそれに仮託した主張をより効果的にするための工夫であると考えられる。

最後の違いは老婆が騎士に示す選択肢である。WB T 以外の三作品ではベッドの中で老婆はこれまで見たこともないような美女に変貌してから、昼と夜のいずれでこの姿でいるのがよいか選ぶように迫る。WB T では老婆は醜い姿のままでも騎士に、生涯このままの姿で貞淑な妻であることと若

く美しく変貌するが常に男たちに取り囲まれる妻であることのいずれを選ぶかと問う。お伽噺としては一日の内に変身があるという前者の奇想天外な状況が面白いが、後者は女性を一人の人間として認めるか否かという老婆の背後の WB のあるいはこの女を象徴的存在としている考え方の問いかけであることは明瞭である。騎士の女性観の変化の有無を鋭く問い質している。ちなみに他の三作品では美女はこれまで自分は魔法にかけられていたのだと説明するが、WB T にはない。お伽噺のなぞ解きはもうどうでもよいことなのである。

物語のこの先の Chaucer だけに見られる展開については既に Sh T との比較において述べた。いずれにせよ以上の比較から WB によるこの女性に独特の男と女の supremacy の考察が中心であって、そのための話りの工夫のあることがいささか浮かび上がって来るであろう。

註

- ¹ 以下の記述に拙論『『パースの女房』小論 誰がライオンを描いたのですか』(成蹊大学文学部紀要 第32号)と多少の重複があることをお断りしておく。
- ² “The Nun’s Priest’s Tale” で雄鶏 Chauntecleer が学識をひけらかす箇所もあるが、これは鶏が人間の真似をするというおかしみの効果があるから納得できる。
- ³ Chaucer の作品の引用は Larry D. Benson (ed.): *The Riverside Chaucer* (Houghton Mifflin, Third edition 1987) による。
- ⁴ 宮廷風恋愛の愛の法廷のイメージ。
- ⁵ Jill Mann: *Geoffrey Chaucer* (Harvester Wheatsheaf 1991) pp. 92-3.
- ⁶ OED “moral” a, 3, a. Of a person, esp. a writer: That enunciates moral precepts. ? Obs. In early quots. applied to writers of allegory.
- ⁷ Text の variation があるが。
- ⁸ Gower の作品の引用は G. C. Macaulay (ed.): *John Gower’s English Works* 2 vols. (Oxford U. P. 1900 & 1901) による。
- ⁹ CT の “The Man of Law’s Tale” と CA 587-1598, “The Manciple’s Tale” と CA 768-817, “The Physician’s Tale” と CA 5131-5306 など。
- ¹⁰ 引用は Thomas Hahn (ed.): *Sir Gawain: Eleven Romances and Tales* (Medieval Institute Publications, Western Michigan University 1995) による。
- ¹¹ 引用テキストは上に同じ。